

第20回 国際会議等の北海道開催の推進に係る各省庁連絡会議 議事録

- 1 日時：令和8年7月22日（水） 13：30～15：30
- 2 場所：中央合同庁舎第3号館 8階特別会議室 ※オンライン併用
- 3 出席：【各省庁】
 - （対面参加）警察庁、環境省
 - （オンライン参加）内閣官房、内閣府、公正取引委員会、金融庁、消費者庁、こども家庭庁、デジタル庁、総務省、公害等調整委員会、法務省、外務省、財務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、防衛省、人事院、会計検査院
 - 【国土交通省（事務局）】北海道局 井田参事官、大石企画調整官 他
 - 【北海道】総合政策部国際局 藤嶋局長 他
 - 【札幌市】経済観光局観光・MICE 推進部 葛西部長 他
 - 【国土交通省観光庁】国際観光部参事官（MICE）付 高築 MICE 連携推進官 他
 - 【日本政府観光局】MICE プロモーション部 板垣次長 他
 - 【旭川観光コンベンション協会】渡辺参事（オンライン参加）
 - 【倶知安観光協会】鈴木事務局長（オンライン参加）
 - 【その他自治体等】（オンライン参加）

4 議事次第

- （1）開 会
- （2）挨 拶
- （3）議 題
 - 1）令和7年度の北海道開催実績及び向こう5年間の国際会議等の開催予定（北海道局）
 - 2）北海道における MICE 等誘致・開催の推進について（北海道局）
 - 3）MICE の誘致・開催の促進（観光庁）
 - 4）北海道の MICE 開催推進に係る JNTO の取組について（日本政府観光局）
 - 5）北海道における国際会議等誘致の取組と現況について（北海道）
 - 6）札幌市における国際会議等誘致の取組と現況について（札幌市）
 - 7）旭川ならではの国際会議誘致の取組（（一社）旭川観光コンベンション協会）
 - 8）倶知安町における戦略的 MICE の取組（（一社）倶知安観光協会）
 - 9）その他情報共有
- （4）閉 会

5 議事及び主な発言内容等

- 1）令和7年度の北海道開催実績及び向こう5年間の国際会議等の開催予定（北海道局）
- ＜資料2－1、2－2について事務局から説明＞
- ・資料2－1 令和7年度における国や独立行政法人等が主催する国際会議の北海道開催実績について、札幌市6件、千歳市1件、函館市1件の計8件であった。

- ・資料２－２ 令和８年度から令和１２年度の向こう５年間の北海道における国際会議等の開催予定について、令和８年度は、現時点で開催済みの３件を含めて札幌市３件、帯広市１件、稚内市１件、様似町１件の計６件、令和９年度以降は３件予定されており、札幌市２件、函館市１件となっており、地方での開催も予定されている。
- ・国際会議等の北海道開催について、各省庁におかれては引き続きご協力をお願いしたい。
- ・資料２－２については、開催地未定案件もあり議題９にて説明したい。

２）北海道における MICE 等誘致・開催の推進について（北海道局）

<資料３－１について北海道局参事官付から説明>

- ・平成２０年７月４日に閣議了解された文書では、「北海道洞爺湖サミットを契機に、従来から進めてきた国際会議等の誘致の取組を強化し、政府として北海道総合開発計画を着実に推進する観点から必要な支援を行っていく。」とされており、本会議はこの閣議了解に基づき開催されている。
- ・北海道総合開発計画は国土計画に分類され、令和６年３月１２日に閣議決定されている。従来の北海道の強みである食と観光を一層強化し、脱炭素化におけるポテンシャルと北海道が有する資源・特性を最大限に生かすため、各種施策を推進することとしている。
- ・これらを推進するための主要施策の一つに「観光立国を先導する世界クラスの観光地域づくり」を掲げており、それを実現するために重点的に取り組む施策として「関係機関との連携による端境期の旅行需要創出に向けた MICE の活用」と、「地方部における MICE 誘致・開催」を位置づけている。
- ・国際会議等の北海道開催の推進により、我が国全体の国際開催件数の増加に貢献し、ひいては観光立国の実現に寄与するものと考えている。
- ・JNTO 基準の国際会議開催件数の推移は、全国および北海道ともにコロナ禍前の 50%程度にとどまっている状況。国の機関等による国際会議開催件数の推移について、件数は少ないもののコロナ禍以降回復傾向にある。
- ・北海道における訪日外国人旅行者数は、令和７年暦年ではコロナ禍以前も含めて 314 万人と過去最高を記録している。北海道における訪日外国人旅行者は、アジア圏からの旅行者が約 85%を占めている状況である。
- ・今後は、欧米豪の観光客を更に呼び込んで、観光消費を高めるような取組をしていければと考えているところ。

<資料３－２について北海道局総務課アイヌ室から説明>

- ・ウポポイはアイヌ語で「（おおぜい）で歌うこと」という意味であり、日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であるアイヌの文化の復興・創造のための拠点として、北海道白老町に令和２年にオープンした。
- ・ウポポイのある白老町は、北海道のやや南西側、太平洋に面した場所で、新千歳空港から車もしくは電車で 40 分ほどの距離、札幌から約 65 分となっている。

- ・施設の広さは、東京ドーム 2 個分ほどの約 9 万平方メートルであり、北海道の自然を感じながらアイヌ文化を体験することができる。
- ・園内各所で様々なアイヌ文化を体験することができる。体験交流ホールではアイヌ伝統舞踊の鑑賞、工房では木彫りや刺繍の体験、コタンゾーン（コタンは集落という意味）では民族衣装の試着など体験できる。
- ・こうしたプログラム含め、ウポポイ HP には詳しい情報が載っている。また、YouTube にウポポイ関連の様々な動画をアップしており、本日は、インバウンド向けに作成した動画をご覧いただきたい。

（プロモーション動画放映）

- ・最後に、エクスカーシヨンの事例を紹介する。令和 5 年度に G 7 札幌気候・エネルギー・環境大臣会合が行われた際のエクスカーシオンとして各国の方々がウポポイにお越しいただいたところ。欧米では先住民族文化への関心が高く、博物館の展示見学アイヌの舞踊鑑賞、衣装試着体験をしていただき、非常に好評だったと伺っている。今年度は 10 月にも MICE のエクスカーシオンで来ていただける予定。滞在時間や体験内容は柔軟に対応できるので、国際会議の北海道開催を検討される際は、エクスカーシオン先としてウポポイの利用を検討いただければ幸いである。

3）MICE の誘致・開催の促進（観光庁）

＜資料 4 について観光庁から説明＞

- ・「1. 世界の MICE の現状」について、統計の数字は ICCA 統計の数字としている。
- ・統計は、3 か国以上ローテーションする国際機関であり、参加者は、50 名以上で定期的に開催という会議を対象としている。
- ・日本は、2025 年の数字で世界 6 位（491 件）。この数字の上にはアメリカとヨーロッパの国しかない。フランスが下におりかなり高い位置づけとなっている。2024 年の数字は、7 位であったが順位が 1 位上がっている。
- ・世界トップ 5 を目指しているが、イギリスが現在 507 件で、その差はわずか 16 件。確実に狙っていけるところを狙いつつも、更なる順位向上が期待できるのではないかとこのところ、国際会議の誘致を日本全体で頑張っていく考え。
- ・2024 年から 3% 減という数字について、2025 年の数字は、あくまで 5 月時点の数字であり、来年は割り増し分が増える予定。傾向的にコロナ後、確実に数は増えてきている。
- ・2019 年、2024 年度の比率という意味では、アフリカや中南米が増えてきており、アジアはまだ 100% には戻りきっていない状況。ただし、アジア太平洋は、非常にポテンシャルがあるということを、MICE 関係者から言われており、実際に世界のローテーション的に、日本という国がしっかり入ってきているという印象を持っている。
- ・都市別では、世界の中で東京が 119 件となっており、2024 年のトップ 10 に入っていなかった 16 位から 10 位に返り咲いている。東京都は、世界 3 位を目指しているが、ポテンシャルという意味で一般の観光客の方も多く、会場の規模的に箱や宿泊施設自体を確保することは

なかなか難しい面もあるが、東京で開催したいという方は多いので、まだまだ伸びるのではないかな。

- ・「2. 日本と北海道の MICE の現状」について、MICE のもたらす効果①では、外国人参加者一人当たりの平均消費額が約 67 万 8 千円となっており、参考に記載している訪日外国人全体の 1 人当たり消費額が約 22 万 9 千円ということなので、その差が 3 倍ぐらいあることが調査からわかっている。
- ・また、MICE がもたらす効果②について、参加者の動向は、飛行機が着陸して飛び立つまでの間を指し、国際会議の開催中において皆様にとって携わるものとなるが、当然、開催中は、会議そのもの以外にレセプション、エクスクーション、地元の PR 動画を流す、ユニークベニューを活用したバンケットを行う、地域芸能を見せるということを行うことで、国際会議をより地域を見せる場にするということを観光庁としては考えている。
- ・また、プレとポストについて、国際会議の開催は、ある程度のインフラがあればどこでもできるが、その前後、もしくは会議が終わった日の夜等に、どれだけ魅力的なところがあるかというところが非常に観点として高い。また、空港からの交通インフラなどの需要も高く、どこでやるかという選択肢となった時の重要な観点ではないかと思う。
- ・実際に国内の平均滞在日数は、平均 6.8 日で約 1 週間は滞在される形となっている。
- ・国際会議は、開催するメニューの運用による効果もあるが、こうした会議が開かれることによって、市民に対して地域のポテンシャルが高いという紹介にもなる。また、大学や研究機関が入ることにより技術が高められるほか、行政にとっては、ノウハウの熟成やネットワークの繋がりもできる。そのほか、民間の方々にとっても様々な商品開発などに繋がるなど本質的な経済波及効果以外による副次的な効果もあることが特徴である。
- ・コンベンション法概要については、平成 6 年に制定されたものとなっている。日本全国のうち 55 都市が国際会議観光都市となっており、北海道では、札幌、旭川、釧路の 3 都市がなっているが、会議冒頭で話もあったように今年は帯広で会議が開催されるなど、国際会議観光都市という枠にとどまらずに様々な都市で会議が開催されている現状である。
- ・このように地方に分散して、かなりの数の会議が日本各地で行われているのが、日本の特徴となっている。
- ・先ほど日本は世界 6 位（491 件）と話したが、日本国内の都市別の順位を調べてみると、札幌は、大阪に次ぐ 4 番目で、これは昨年と変わっていない。札幌市のほか、福岡、横浜、北九州といったところが追いついてきている。国際会議は、当然 1 件しか開催できないため、日本国内で誘致競争が行われている状況。
- ・ただ、金沢など 5 件から 9 件といったところの開催都市が増えてきているのも特徴であり、それだけ地方の誘致が進んでいるということを示している。
- ・北海道における過去 10 年の開催実績については、札幌市が一定数開催されており、コロナ前後で 20 件程度以上開催している。他のところも継続的に開催されているが、会議を 1 回開催することでノウハウが蓄積され、次の会議もとなる。継続的に行うと当然負担も多いし大変だが、北海道は他のところに負けないぐらい誘致を進めていただきたいと考えている。

- ・各地方における国際会議開催の推移について、先ほどの札幌の件数も加えた上で、北海道全体として2025年は、対前年比で2%ボリュームが減っている。九州、沖縄などは2019年比だと、2倍以上となっている。東京はかなり安定的で（対前年比）26%、近畿も（対前年比）25%。東京都と近畿（大阪）は、ともに1/4、1/4と増えている形で、この2つの地域がかなり多く開催していると言える。
- ・「3. MICEにかかる観光庁の取組」について、資料のとおり昨年も同じように様々な事業を紹介させていただいたが、今年は特化した形で説明させていただきたい。
- ・今年3月に観光立国推進基本計画が改正され、MICEの目標として、世界5位以内というものを目指しているところ。2030年までにアジアNo.1の国際会議開催国としての地位を確立し、欧米上位国に拮抗する世界5位以内を目指すことが、MICEとしての動きである。早いうちに5位以内を達成するとその地位を継続することも大変だが、我々としては2030年まで待っている必要はないと思っており、少しでも早く世界5位以内を目指したい。
- ・令和8年度地域のMICE誘致力強化促進事業として、先ほど、飛行機で日本に着いて日本から出ていくまでが国際会議の開催中であると説明したが、会議開催以外の滞在中にもなるべくお金を落としてほしいというのが観光業界、我々の願いである。どうしても開催地だけにお金が落ちてしまい、開催地以外へ行く機会が少ないことを問題意識と感じており、改善していきたいと考えている。
- ・開催地以外での実施事業は、次のページを見てもらうと一番分かりやすいが、札幌・小樽・ニセコエリアによるMICE広域連携ポストツアー実証事業で、札幌コンベンションビューローなどと調整し、来週、専門家の方と一緒に、現地視察を行う予定である。
- ・会議は、観光学分野の専門家が参加する国際会議「13th TTRA APac Annual Conference」というもので、12月上旬に札幌市で実施されるが、実施エリアとして、札幌・小樽・倶知安などのニセコエリア、実施体制として、倶知安観光協会、倶知安町、小樽市など3つの関係者が入っているものであり、協働して実証事業を行うものである。
- ・この実証事業の課題として、札幌・小樽・倶知安などのニセコエリアへ周遊する海外のインセンティブツアーが限定的であることや、12月上旬のためニセコエリアは降雪前のスキー場がオープンする前の一般的な閑散期にあたるため、そのような時期に何が見せられるかということチャレンジする内容となっている。
- ・具体的には、国際会議が開催される札幌で会議を行い、翌日、翌々日に札幌からニセコ、小樽の方に回って、景観・食などを楽しむことや宿泊を通して観光学の専門家の方々からご意見をいただき、いわゆるオフシーズンの時にどういった楽しみ方ができるかということを実証事業的にやってみようという形の事業となっている。
- ・この事業は、全国の様々な案件の中から採択されているもので、オフシーズンに開催する国際会議を地域の方がどのように引っ張り込めるか、まさに国際会議誘致の見せ場になると感じている。平日の滞在や長期滞在を促すことなどは、基本的にハイシーズンでは絶対やらないので、そうした時にどれだけその開催地以外のところにお金を落としてもらい、楽しんでもらい、こんなところもあるのだということを実感していただくような取組である。地域が連携した成果として、例えば、翌年以降に近郊等で会議があった時、では今度、エクスカ

ーションとして近郊のエリアも紹介しようといったことになれば、札幌以外のところへも広がっていくものと考えられる。

- ・実証事業を通じて、どのような成果・反応があるかということを非常に楽しみにしているところ。
- ・次のページは、MICE 施設の受入環境整備事業として、MICE 施設のハード整備というものに対して補助を行う事業である。サステナビリティ、SDGs、太陽光発電、LED など、なるべく地球環境にとって優しい設備のほか、世界的には一般的に整備されている無線 LAN だとか、技術が高まる中で、スクリーン・プロジェクターといった映像配信機能の強化などの整備にあたり、上限はあるが 1/2 補助を実施しているもの。
- ・最後のページは、いわゆるソフト事業（コンベンションビューロー等の MICE 誘致体制強化事業）となっており、補助金の設定をさせていただいている。JNTO の方からも説明があると思うが、海外の MICE イベント、これから秋以降も非常に多くのものが開催されると思う。そのようなイベント等に出店される方々の旅費等の負担をさせていただくもの。なるべく費用を抑えて、海外の PCO（専門事業者）の方々に対して現地で PR 活動を行っていただき、開催実現に向けたコネクションなども含めて、開催の拍車がかかるとよいと考えている。
- ・最後の海外 MICE 誘致 PR 活動支援については、通常、国際会議の誘致は、一般的に前回とか前々回（3 年前とか 5 年前）に決まることが多いため、そういった場に出させていただいて、最後の現地での PR 活動、ファイナルプレゼンテーションなど自治体等の方に出させていただき会議開催以外でも、食・自然・体験というものも楽しめますということを、PR するための旅費等を補助しようという新規事業である。当然、今後、国際会議を誘致する際には、色々な機会、誘致活動の重要な局面があると思うので、そのような時に活用いただければと考えている。各自治体の方は、今後、PR 活動について検討いただければということを最後の言葉とさせていただきたい。

4) 北海道の MICE 開催推進に係る JNTO の取組について（日本政府観光局）

<資料 5 について JNTO から説明>

- ・JNTO は、国土交通省所管の独立行政法人であり、東京本部のほかに、現在、26 カ所に海外事務所を設置している。MICE の誘致・開催の促進についても、JNTO の主要事業の一つであり、ニューヨーク、ロンドン、ソウル、シンガポールの 4 都市に MICE 専門スタッフを配置している。
- ・JNTO の MICE 事業では、国際会議の誘致・開催支援、ミーティング・インセンティブ旅行の誘致・開催支援に加え、両分野を横断する取組、人材育成およびデジタルマーケティングの 5 つの柱に基づき、総合的な取組を行うことにより、我が国への MICE 誘致の促進を図っている。
- ・国際会議の誘致・開催支援においては、非常に多くの関係者が関与している。JNTO では、海外においては国際本部や開催地決定に大きな影響力を持つ会議運営会社（コア PCO）に向けて、セールス活動や各種プロモーションを実施している。また、国内においては、学会・

協会等の国内主催者、コンベンションビューロー、ステークホルダーおよび関係省庁と連携し、「チームジャパン」として国際会議の誘致・開催に向けた支援を行っているところ。

- ・ 国際会議の誘致から開催までの JNT0 の支援内容について、特に誘致段階でのサポートに力を入れている。学会・協会等の国際会議の主催者となりうる先生方に対して、開催候補都市選定の支援、立候補書類（ビットペーパー）の作成支援、立候補時のプレゼンテーションのサポート、ロビー活動支援などを実施している。
- ・ 立候補書類（ビットペーパー）の作成支援では、関係省庁や JNT0 理事長名での招請レターの発行支援を行っている。また、開催地選定に向けた英語によるプレゼンテーションのコンサルティングも提供している。複数の開催候補地との競争を伴う国際会議においては、こうした支援を活用することで、より効果的な提案につながることが期待されるため、積極的に活用を検討いただきたい。
- ・ 国際会議に向けた取組として、JNT0 では国内外への情報発信を行い、国際会議の誘致・開催支援に関する PR や、地方都市の魅力発信に取り組んでいる。各地で開催された国際会議の事例をケーススタディとしてまとめ、JNT0 の MICE サイト（日・英）で掲載している。北海道で開催されたケーススタディの一例として、ATWS（Adventure Travel World Summit）を掲載している。本事例では、主催者である Adventure Travel Trade Association（ATTA）CEO のシャノン氏と、受入側である ATWS 北海道実行委員会 事務局長の後藤氏にインタビューを実施し、その内容をウェブサイトへの掲載やメール発信等を通じて、国際会議の主催者に向けて情報発信を行っている。
- ・ 先月、帯広で開催された国際動物繁殖学会（ICAR）についても取材を実施した。JNT0 としては、地方で開催された特色のある国際会議の事例を広く主催者の方に知っていただきたいと考えており、ICAR は、帯広の学術と産業の強みを生かした国際会議の好事例の一つとして考えている。
- ・ ICAR の主催者の一人である北里大学の菊地先生は、JNT0 の MICE アンバサダーに就任いただいている。今回の取材においても多大な協力をいただいた。先生へのインタビューでは、地元ブルワリーと連携してオリジナルビール「ICAR Beer」を製作し、参加者から好評を得たとのエピソードも伺った。こうした地域との連携による特色ある取組も含め、ケーススタディとして、JNT0 のウェブサイトに掲載する予定である。
- ・ JNT0 では、全国の国際会議観光都市を紹介する日本コンベンション都市ガイドを作成しており、札幌・旭川・釧路の3都市を紹介している。市内の施設情報、ホテル、開催実績等を掲載しており、デジタルパンフレットのほか、ウェブサイト上でも施設の検索・閲覧できる形としている。
- ・ また、JNT0 では、国際 PCO 協会（IAPCO）とパートナーシップ協定を締結している。IAPCO は、会議運営会社（PCO）が加盟する国際団体であり、その中には、国際本部に対して開催候補地の推薦等を行うなど、開催地選定に大きな影響力を有するコア PCO も含まれている。JNT0 では、こうしたコア PCO を日本に招請し、地方都市を視察いただく事業を実施している。コンベンションビューロー等との交流の機会を設けることで、ネットワークの形成や将来的な国際会議の誘致促進につなげている。

- ・ JNTO では、MICE アンバサダープログラムを運営している。産業界や学術分野において、国内外で影響力のある方々を MICE アンバサダーとして任命している。現在 65 名が就任しており、北海道では、北海道大学の坂本先生にも近年 MICE アンバサダーに就任いただいている。
- ・ また、JNTO では、「国際会議誘致・開催貢献賞」を実施している。ベストプラクティスとなり得る国際会議の誘致・開催事例を募集し、有識者による審査の上、表彰を行っている。「大規模会議部門」に加え、「中小規模会議部門」も設けており、地方で開催された特色のある国際会議も表彰の対象としている。今年度の募集も開始されたところであり、優れた事例があれば応募いただき、PR 等に活用いただきたい。
- ・ インセンティブ旅行誘致に向けた取組として、JNTO では昨年度、ウェブサイトに掲載しているインセンティブ旅行のモデルコースを刷新し、現在 10 コースを英語で発信している。北海道については、グリーンシーズンとウィンターシーズンの 2 コースを掲載している。今年度、韓国語、中国語（簡体字・繁体字）、ベトナム語、タイ語への展開を予定している。
- ・ これらのコンテンツを活用し、JNTO の海外事務所におけるセールス活動や、海外で開催する商談会等において、北海道をはじめとする地方都市の PR をしていくもの。
- ・ また、インセンティブ旅行誘致に向けた商談会を実施しており、今年度は 6 都市で開催を予定している。商談会には、インセンティブ旅行を取り扱う旅行会社が参加する。現在、10 月にマレーシアで開催する商談会の参加募集を行っているほか、ジャカルタで開催する商談会についても 8 月から募集開始を予定している。是非活用をご検討いただきたい。
- ・ 今年度、JNTO の支援により北海道での開催が決定したインセンティブ旅行の事例を紹介する。左側の事例は、東南アジアのグローバルマルチレベルマーケティング企業による約 800 名のインセンティブ旅行である。現地視察を支援した結果、札幌などを訪問するインセンティブ旅行として北海道での開催が決定した。
- ・ 右側は、グローバル金融機関によるインセンティブ旅行の事例である。札幌・登別・小樽を訪問する 4 泊 5 日の行程となっており、規模は約 70 名と比較的小規模であるが、高付加価値型のインセンティブ旅行となっている。いずれの事例においても、競合先が存在したが、JNTO の海外事務所が、現地旅行会社や企業による視察を支援することにより、日本での開催決定を後押しした。
- ・ SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を活用した情報発信について、JNTO では、現在、BtoB 向けの SNS である LinkedIn（リンクトイン）を活用し、情報発信を行っている。LinkedIn は、利用者が勤務先や業種、役職等を登録するビジネス向けの SNS であり、JNTO では、主催企業、旅行会社、ミーティングプランナー等のインセンティブ旅行関係者や国際会議の主催者等を対象に情報発信を行っている。
- ・ 現在 4 万 3 千人程度のフォロワー数を有しており、世界の政府観光局が運営する LinkedIn アカウントの中でも、比較的多くのフォロワー数を獲得している。

- ・ 具体的な北海道関連コンテンツの掲載事例として、一つ目は、札幌の学术界と産業界の強みに関する投稿である。国際会議を誘致する上で必要になる情報をコンパクトにまとめた資料を紹介している。
- ・ 二つ目が釧路におけるクルーズ船でのレセプションに関する紹介である。下段では、インセンティブ旅行向けの体験コンテンツとして、グリーンシーズンおよびウィンターシーズンのコンテンツを紹介している。
- ・ こうしたコンテンツは、エンゲージメント率が 10%台後半から 20%台と比較的高い水準となっており、関心を持って閲覧されているものと考えている。今後も有益なコンテンツがあれば、ぜひ情報提供いただきたい。
- ・ 人材育成の取組として、日本全体の MICE 誘致能力の向上を目的に、毎年 MICE セミナーをオンライン版とアドバンス版（研修）で実施している。
- ・ オンライン版の MICE セミナーは、MICE に関する基礎的な知識を学べる内容となっており、8 月 31 日まで視聴可能である。MICE 関係者の皆様にぜひ活用いただきたい。
- ・ オンライン版については、本年度、札幌国際プラザと連携して実施しており、札幌国際プラザの稲垣部長にも講演いただいている。
- ・ また、アドバンス版の MICE セミナーは 8 月下旬に開催予定であり、講義はすべて英語で実施する。現在参加申込みを受け付けており、先ほど紹介した IAPCO による MICE の最新トレンドに関する講義やワークショップ等を予定している。こちらもぜひ参加をご検討いただきたい。
- ・ 参考資料として、JNTO が本年 4 月に観光庁と共同で公表した「MICE マーケティング戦略」の概要資料を添付している。
- ・ 本資料では、JNTO がどういう形で MICE の誘致に取り組んでいるかという方針であり、参考としてご覧いただきたい。

質疑応答

北海道局

- ・ 商談会を海外の地方都市で行う時、海外の方が聞いてくる内容として、どのような特色があるか。例えば、知名度、それとも知名度がないけど行ってみたい場所、こういうものがあるようなところ、食べ物なのか、感覚的なもので構わないので、海外の方の心が動かされるようなことなどが、もしあれば伺いたい。

JNTO

- ・ インセンティブ旅行の商談会は、アジアで開催しているが、北海道は、アジアでの知名度も高く、そういった意味で非常に強みがあると思っている。やはり札幌がゲートウェイになるが、直接入ってくる方、東京経由などで入ってくる方、それぞれモデルルートで見せていくことが必要と思っており、今回、2 コース北海道で設定させていただいている。
- ・ その中で、どういうところでユニークなレセプションができるのか、北海道ならではの体験ができるのか、そういったものを組み入れながら商談をするのがよいのではないかと考えて

いる。サイズ感の大きいインセンティブ旅行もあれば、先ほどのように少し小ぶりの旅行もあるので、そういったものに個別に対応できる資料をまずはきっちり用意することが重要ではないかと考えている。

5) 北海道における国際会議等誘致の取組と現況について（北海道）

<資料6について北海道から説明>

- ・ 2008 年の北海道洞爺湖サミット開催を契機に、国際会議の誘致を強化してきた。サミット時には、来場した各国の要人や家族、スタッフの方々に対して、開催地の洞爺湖のみならず、道内の各都市の魅力と特性を生かした交流事業やレセプションを行った。
- ・ 今後とも、様々な国際会議などを誘致することによって、北海道ブランドおよび北海道内の各市町村のブランドを、アジアはもとより、欧米諸国など世界に向けて、より戦略的かつ効果的に発信してまいりたいと考えている。
- ・ 北海道では、北海道総合計画および北海道グローバル戦略において、国際会議の誘致を重要な施策として位置づけている。これまで道内各地で国際会議が開催されており、最近では 2023 年の G7 札幌気候・エネルギー・環境大臣会合、同年 7 月の日 ASEAN 次官級交通実務者会合などが行われたところ。この場を借りてお礼申し上げるとともに、引き続き北海道の知名度向上に向けて誘致を進めてまいりたいと考えている。
- ・ 推進体制として、北海道国際会議等誘致推進会議はオール北海道として官民で取り組む地元のサポート体制のために立ち上げた組織であり、現在も情報共有等を行っている。さらに、各都市のコンベンションビューローなどからなる北海道 MICE 誘致推進協議会というものを立ち上げており、各地のネットワークを活かしながら魅力ある国際会議のサポートを行っている。
- ・ MICE 開催に係る民間および各種学会など、開催に係る支援制度として、開催経費に対する補助金なども用意している。こうした体制と支援制度により、引き続き誘致を推進していきたいと考えている。
- ・ 道内の主なコンベンション施設について、札幌のコンベンションセンターをはじめとする道内主要都市の会議施設のほかに、北海道洞爺湖サミットが開催されたザ・ウィンザーホテル洞爺や、星野リゾートトマムなど、全道各地に国際会議等に対応する施設がある。
- ・ 本道へアクセスするための交通インフラについて。各国との国際航空便は、現在、新千歳空港および函館空港から、主にアジア地域を中心に、14 路線が 6 か国・地域、10 都市と結ばれている。韓国および台湾便は、デイリーのみならずダブルデイリー以上で運航されているものもある。中国路線については、中国による日本への渡航自粛要請の影響により、北京首都国際空港（ペキンしゅとこくさいくこう）線、深圳宝安国際空港（しんせんほうあんこくさいくこう）線、西安咸陽国際空港（せいあんかんようこくさいくこう）線の 3 路線が運航されていない状況である。
- ・ 本年の大きな動きとしては、12 月から 3 月にシドニーへのカンタス航空の定期運航が予定されている。さらに、同じく 12 月には新千歳空港と北米の路線ができる。サンフランシス

- コ線およびバンクーバー線がそれぞれ就航予定であり、アメリカおよびカナダとの路線ができることにより、北米からの来道者増加が期待できる。
- ・北海道新幹線について、現在、函館市の隣の北斗市に新函館北斗駅がある。東京からの最短時間は4時間弱だが、東京のみならず北関東および東北などからのアクセスも良好で、天候次第では航空便よりも利便性が高い要素もある。北海道新幹線では、一部在来線と共用しており、すれ違いの関係で最高速度が時速160キロに制限されているが、現在、高速化に向けた取組が進められている状況となっている。
 - ・今後の札幌までの延伸により利便性がさらに高まることが期待できる。また、冬季の大雪の時には新幹線はトンネルが多いため、運休が少なくなることが見込まれる。
 - ・国際会議におけるエクスカーシヨンの関係として、歴史、文化施設については、2021年に北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されたことにより、縄文時代を彷彿とさせる植生や地形など豊かな自然環境が保全されており、縄文時代の人々の暮らしに思いを馳せながら、イベントを楽しめるような貴重な文化遺産となっている。海外の方々にもこうした文化、歴史に触れていただくことは、北海道のみならず日本の魅力を発信することにつながるため、ぜひ活用いただければと思っている。
 - ・道内における国際会議の開催事例として、G7札幌気候・エネルギー・環境大臣会合では、環境関係、クリーンエネルギー、GXのグローバルな推進について議論が行われたところ。会議開催に合わせ、機運の醸成および道民の当事者意識を高めるために、カウントダウンモニュメントやシンポジウムなど様々な取組を行った。実際の現場では、地方自治体によるレセプションおよびエクスカーションなどを実施し様々な魅力を発信したところ。
 - ・2023年9月には、アドベンチャートラベルワールドサミットをアジアで初めてリアル開催した。当時は64か国から約800名が参加した。自然、アクティビティ、文化体験などで北海道は非常に優位性があると考えている。
 - ・北海道の優位性は、世界から評価されている。食の面では、新鮮な海の幸、旬のフルーツ、野菜などの安全・安心な食がある。また、お酒についても、最近北海道内では日本酒の酒蔵やワイナリーも増えている。道南の奥尻島では、平成20年頃からブドウの栽培からやっており、奥尻ワインというものがあるので、機会があれば是非ご賞味いただきたい。
 - ・多彩な景観、温泉などの豊富な観光資源に恵まれており、アクティビティもたくさんあり、夏涼しいというのも観光資源と考えている。
 - ・技術の面では新たな成長分野として、今後成長が期待されるGX、AI・DXなどについて、北海道には強みがある。再エネ導入のポテンシャルが大きい。広いということもあるが、太陽光発電、中小水力など地域が受け皿となっている。
 - ・もう一つは、国際海底通信ケーブルの関係である。北海道は北米・欧州に近いという地理的優位性があるため、ケーブルプロジェクトの陸揚げ拠点の一つとして選ばれているところ。こうした北海道が有するポテンシャルを背景として、ラピダス社が立ち上がり、次世代半導体について、試作ラインが立ち上げられ、量産化に向けて進められているという状況である。

- ・ もう一つ、データセンターの整備が進んでいることについての理由だが、北海道の冷涼な気候が考えられる。データセンターは大量の電力を使用するためサーバーを冷却する必要があるが、北海道は冷涼な気候を活用でき、効率的な運用が可能。苫小牧の例では、国内最大級となるA I データセンターの建設が進んでいる。今年度から段階的な稼働開始が予定されており、大きなプロジェクトになっているところ。
- ・ こういった分野に関しても、会議の開催にあたりポテンシャルがあるものと考えている。
- ・ 最後まとめとなるが、これまでのノウハウを最大限活用し、国際会議の誘致に取り組み、北海道を様々な形で海外発信し、北海道の更なる発展に繋げてまいりたいと考えており、各省庁の皆様には、引き続き深くご支援ご協力をお願いしたい。

6) 札幌市における国際会議等誘致の取組と現況について（札幌市）

<資料7について札幌市から説明>

- ・ コンベンション開催地としての札幌市の特徴について、市の強みである学術分野としては、北海道大学を中心に世界トップクラスの研究が展開されており、特に地球科学に関する論文の被引用数は、国内2位となっている。2023年度には秋篠宮皇嗣殿下がご臨席された国際電波科学連合総会が開催されたところ。
- ・ 感染症学としては、北海道大学の人獣共通感染症国際共同研究所は、2011年にWHOから協力センターとして指定された、世界初の人獣感染症に特化した研究機関である。さらに、70年以上の歴史を持つ低温科学研究所や国内3位の論文被引用数を誇る獣医学・酪農学など、4つの学術分野について特に優位性がある。
- ・ 札幌の産業分野といたしましては、観光や食といった重点分野に加えて、2024年6月に、金融・資産運用特区および国家戦略特区の指定を受けた。現在は、GX、AI、金融の3つの先進分野を、新たに誘致を強化する分野として定めている。
- ・ GXおよびAIに関することで、北海道は非常に豊かな自然に恵まれており、全国トップクラスの再生可能エネルギーのポテンシャルがある。こうした多様な環境がAIの実証フィールドとしても最適な状況となっており、次世代半導体、洋上風力、データセンターなどのGX関連の大型プロジェクトがすでに展開されているところ。また、農業・医療分野における最先端のAIの研究開発も進行されている。
- ・ こうした全道的な動きと緊密に連動させていただきながら、札幌市域においては、金融機能を強化し、資産運用会社をはじめとする金融機能の集積を促す環境整備を推進している。
- ・ 国際会議の開催状況としては、2023年のG7札幌気候・エネルギー・環境大臣会合がある。地元の実行委員会の立場で携わったが、当時環境省および経産省には大変お世話になったところ。今後もこうした政府系国際会議を誘致すべく、札幌市としても頑張っていきたいと考えている。
- ・ 政府系以外の国際会議としては、昨年10月に東洋東南アジアライオンズフォーラムが開催され、約1万人を超える参加者であった。昨年10月23日から26日の日程で開催され、東洋東南アジア地域のライオンズクラブ会員が一堂に会する国際会議で、札幌では41年ぶりの開催であり、国内外から約1万人が参加した。大和ハウスプレミストドーム（札幌ドー

ム)を全面使用した開会式では、札幌ならではのよさこいソーランの演舞、地元高校生による演奏、外国語ボランティアをはじめ、市民と参加者が交流する機会を設けて、地域一体となり、国内外からの参加者へおもてなししたところ。こうした大会の成功が、今後の大規模な開催に向けた受入能力につながるものと考えている。

- ・今後の新たな MICE 施設の整備に関する紹介となるが、来年 9 月に開業予定の新たな展示施設（札幌産業展示場）がある。現在、札幌市内にはアクセスサッポロという 5,000 平方メートル規模の展示場があるが、新展示場は後継施設となり、広さも 3 倍にあたる 15,000 平方メートルの面積となっており、来年 9 月の開業を予定している。
- ・この展示ホールは、1,500 平方メートルから 2,500 平方メートル、7 つに分割が可能であり、その他にも会議室および控え室を備えている。さらに、この施設は環境に配慮しており、札幌市の所有施設として初めて Nearly ZEB（ニアリーゼブ）認証を取得したところ。
- ・もう一つは、2033 年でまだ先だが、都心部に計画する新たな MICE 施設の紹介である。この施設は、会議と展示が一体的に開催できて、施設の収容として 3,000 人から 5,000 人規模、周辺ホテルとの連携により、5,000 人を超える MICE にも対応可能な施設となる予定である。
- ・札幌パークホテルという非常に歴史のあるホテルが隣にあるが、こちらも今年度で閉館し、建て替えを予定している。この札幌パークホテルの建て替えと連動して MICE 施設を整備し、一体的に利用できるような施設とする予定である。
- ・立地としては、自然豊かな中島公園に隣接しており、地下鉄中島公園駅からの直結ということで、新千歳空港からは屋外に出ることなく、この施設までアクセス可能となる。すすきのまでも徒歩圏内であり、周辺にはインターコンチネンタル札幌をはじめ、様々なハイグレードのホテルも集積しており、非常に優れた立地である。
- ・現在、こちらの施設は P F I の手法を念頭に置きながら、事業計画を検討中であり、今年の秋には基本計画を公表する予定。
- ・以上、札幌市の取組となるが、国際会議等の北海道・札幌開催の推進に向けて、各省庁の皆様のご支援とご協力について、改めてお願い申し上げます。

質疑応答

観光庁

- ・質問というよりコメントとなるが、先ほど北海道の藤嶋局長から、ATWS（アドベンチャー・トラベル・ワールド・サミット）2023 について話があったところ。開催実現まで懸命に取り組まれた関係者の方々に敬意を表するとともに、会議を通じて、北海道がアドベンチャートラベルに適した場所であることが広まったと考えられる。
- ・また、その話に関連して交通インフラに関する説明もあったところだが、12 月から新千歳～バンクーバー線が就航する予定と伺ったところ。調べてみたが ATWS 2026 が 9 月にカナダ・ケベック市で開催される予定とのことで、大きな相乗効果が期待できるのではないかと感じている。
- ・ケベックとバンクーバーはカナダの東西に位置しており距離はあるが、藤嶋局長をはじめ関

係者の皆様が現地でさまざまな PR 活動を行われることで、北海道の認知度向上や誘客促進につながることを期待している。

- ・このような国際会議やイベントは、どうしても開催後、一過性の取組として終わってしまいがち。しかし、開催を通じて構築されたネットワークや人脈をうまく活用し、その後の観光誘客やビジネス交流につなげていくことが非常に重要と考えている。同じ規模の国際会議を再び誘致することは容易ではないが、そこで築いた関係性を継続的に活用することは十分可能ではないかと考えている。
- ・特にアドベンチャートラベルは、欧米を中心に世界的な人気を集めている分野。また、その市場や考え方自体も北米を中心に発展してきた経緯があり、北海道との親和性も非常に高いと感じている。
- ・近年は新たな航空路線の就航や海外とのネットワークの拡大が進み、北米とのつながりも着実に強化されている。こうした取組は大きな成果として現れているのではないかなと思うので、今回の ATWS で得られたつながりを生かしながら、北米、とりわけアメリカやカナダから北海道への誘客につなげていただきたいと思います。
- ・そして、その流れが観光にとどまらず、将来的には国際会議や展示会、インセンティブ旅行など、MICE のさらなる誘致につながるような取組をぜひ進めていただければと考えている。

7) 旭川ならではの国際会議誘致の取組（（一社）旭川観光コンベンション協会）

<資料 8 について旭川観光コンベンション協会から説明>

- ・北海道には札幌、函館、ニセコなど、それぞれに魅力ある複数の MICE 開催都市がある。その中で旭川が目指しているのは、今ある地域資源を活用した国際会議の誘致である。
- ・旭川は、人口 31 万人の地方都市であるが、日本で最も有名な動物園があったり、世界的な家具産業、北海道の自然を生かした先進的なものづくりの企業、さんろく街という飲み屋街の夜の文化など、大都市にはない独自の資源を有している。本日は、会議参加者に旭川でしか体験できない価値を提供する 5 つのプログラムを紹介させていただく。
- ・提案の一つとしては、旭山動物園のレセプションである。通常見ることができない夜の動物園を国際会議参加者のためだけに特別開放したものとなっている。昨年の 7 月と 10 月には医学系学会約 100 人のレセプションを実施し、大変好評をいただいたところ。参加の皆様からは、これまでに参加した学会の中で最も記憶に残るレセプションだったという声もいただいている。夜の動物園という非日常空間は、参加者同士の交流を自然に生み出し、学術交流と北海道の自然体験を融合した特別な MICE プログラムとなっている。
- ・次の提案は、株式会社エフイーという会社である。北海道は、農業の盛んな地域であり、農業の DX フードテックを学ぶ企業施設の視察である。エフイーは、野菜の洗浄機選別機械を世界へ展開する企業。北海道は、日本最大の食料の供給基地だが、旭川では農業とものづくりと輸出という新たな作業モデルを実践している。
- ・国際会議の参加者が、食料の安全保障、農業技術、地域産業振興について学ぶことができる、非常に特色のあるエクスカージョンとなる。この会社では、東南アジアに輸出をしてお

り、東南アジアで生産者が機械で大根と野菜を洗うことにより労働時間が半減し、買取価格が上昇して生産者の収入の増加となるという効果も出ていると伺っている。

- ・ 次の資料は、正和電工という会社である。観光環境技術、SDGsなどをテーマにした企業の視察である。正和電工は、水を使わないバイオトイレや浄化装置を開発し、国内外へ展開している。その技術は、災害対応、自然環境の保全、発展途上国支援など、世界的な社会課題の解決に貢献している。環境およびサステナビリティをテーマとする国際会議において、旭川ならではの技術視察プログラムとして大きな期待を持っている。
- ・ 次は、旭川家具とデザインを活用したプログラムである。旭川は、日本5大家具の産地の一つと知られている。カンディハウスは、世界に向けて発信する高品質家具製造現場を見学し、地元産材の利用デザイン経営、植林から再生までの持続可能なものづくりを学ぶことができる。近年、国際会議はSDGsやサステナビリティが重要なテーマとなっている。このプログラムは、北海道の森林資源とデザイン産業を体感できる視察メニューとして、海外参加者に大きな関心を持っていただけると考えている。
- ・ 次に、旭川のスナック体験の事業である。日本独自の夜の文化スナックを体験するナイトプログラムとなっている。旭川の歓楽街（さんろく街）で参加者が地元の方と交流し、日本人のおもてなしおよび地域文化を体感することができるもの。このプログラムは国際会議レセプション後の二次会プログラム参加、翌日からのスムーズな学会運営、参加者の和やかな雰囲気づくりなどの効果があり、海外参加者から非常に高い評価を得ている。特に地元の人と自然に会話できたことが一番の思い出になったという声が多くあるところ。ビジネス旅行を文化体験に変えるプログラムとして展開している。
- ・ 最後となるが、旭川が提供したいのは、スペックにこだわる会議の開催地ではない。旭川にしかない体験である。例えば、夜の動物園、世界に誇る家具産業、農業、環境技術、日本の夜の文化である。これらを通じて参加者の記憶に残り、再び訪れたいくなるMICE開催都市旭川を目指している。
- ・ 北海道には多くの魅力的な開催都市があり、その中で旭川は自然・産業・文化を融合した体験型MICEのモデル都市として、国際会議の誘致に取り組んでいるところ。

8) 倶知安町における戦略的MICEの取組（（一社）倶知安観光協会）

<資料9について倶知安観光協会から説明>

- ・ 北海道ニセコエリアの中核にある倶知安町から、MICEの取組について紹介させていただく。昨年、観光庁の先駆的DMOに選定されたところだが、特にニセコの課題である、トップシーズン（冬）とグリーンシーズン（夏）の繁閑差の解消が、MICEでは非常に重要な位置づけになっている。
- ・ MICEに取り組んだのは5年前だが、着任前に私もアメリカのハワイ州の方で、MICEに関わっていた。特にインセンティブの市場をやっていたので、ニセコでもこのMとI（ミーティングとインセンティブ）について、特化した展開を広げている。倶知安町では2019年にはG20（ジートゥエンティ）観光大臣会合も実施されたところ。

- ・ 昨年 10 月に MICHELIN Key（ミシュランキー）の発表が全国であったが、北海道は 7 つの選定があった。その 7 施設すべてがニセコエリアにあることは、我々としても非常に大きな武器になっている。また、今朝のニュースでもあったが、フランスのホテルグループで「メルキュール」ブランドを展開するアコーグループが、日本で 2 か所目となるフェアモントブランドのリゾートホテルをニセコに開業する計画を発表した。開業は 2028 年初頭を予定している。世界ブランドのラグジュアリーなホテルが集まっている点が、誘致に非常に有利と考えている。
- ・ MICE を手掛けてから、約 5 年だが、受注件数も毎年増えており、年間で約 100 件程度運営している。内訳を見ると、インセンティブが 8 割、経営会議や株主総会等のミーティングが 2 割である。昨年あったのは、アメリカ各地からの全米の株主（アメリカ資本の会社）が、日本で初めて持ち出しの株主総会をやるということが現地で決まって、パークハイアットホテルは非常に人気があり、そこに 4 連泊で 50 名サイズの大きな滞在連泊につながったケースもある。
- ・ ニセコの MICE の誘致は、4 月から 10 月、グリーンシーズンとして、特化した営業を展開している。先ほど観光庁から紹介あったが、小樽・ニセコ・札幌が、そういった主要ルートの MICE にも非常に人気があるところになっている。
- ・ ニセコにはピークでだいたい 70 カ国ぐらいの国々の方々が住んでおり、訪れる方も世界中から 112 カ国の方々が来られる。言語対応が非常に、スムーズになっているところが強みである。多言語に対応できる施設が非常に多いということと、英語ベースのやり取りサービスが可能だということも強みである。
- ・ また、先ほど紹介のとおり、国際基準のホテルは非常に揃っており、ファシリティとしても非常に有効性があると思っている。インセンティブを中心にやっていると、あまり大きなグループだと実は取れない。大きなコンベンション施設がないので、だいたい 20 名から 100 名ぐらいのサイズの、マイクロ MICE という言い方をしているが、小規模のインセンティブに滞在連泊していただくことが、我々としては一番の狙いである。
- ・ 実際の MICE 事例を少し紹介すると、ガストロノミーについて、だいたい 30 分圏内に山の幸や海の幸が非常に揃っているところと蒸留所である。現在はジンを販売しているが、ウイスキーの仕込みをしていて非常に人気がある。
- ・ ニセコらしく野外で、だいたい 50 名から 100 名ぐらいのサイズのパーティーができるプランで人気を集めている。写真は、後ろの方にトウモロコシ畑が広がっていて、そのトウモロコシ畑の前でこの演奏などもしている。バーベキューは非常に人気のプランである。
- ・ パークハイアットホテルのパティオのところでの立食のレセプションなんかも人気がある。外国車のメーカーの展示会なんかもクローズのイベントでよく行われているところだが、そういったパーティーも可能。
- ・ 夏のグリーンシーズンの要素を備えながらも、冬季はスキー場としての機能や利用シーンが明確である。加えて、ゲレンデ利用者向けの施設が山頂や麓に配置されているため、エリア構成が直感的に理解しやすい。昨年オープンした施設も合わせて 3 箇所、トータル 1000 人ぐらいのキャパシティのいわゆるコンベンションにも使えるゲレンデ施設がある。冬は当然ゲレンデでレストランをやるが、冬に比べ夏は稼働率が下がるので、ここをいわゆるコンベンション施設として活用する案の構想をしている。

- ・写真は、冬に実際に食堂として展開をしている場所であるが、パーティーなどで、テーブルクロスなど全て張り替えたり、椅子の入れ替えも可能。実際の料理も、パークハイアットのホテルのシェフが実際に作られて提供する聖餐スタイルのコース料理なども非常に好評だったもの。
- ・時間があれば、またニセコ MICE で検索いただければ、中にエージェントがすぐに使えるコンテンツなど 200 プランほど入っており、そちらご覧いただければよくわかるかと思うので参考にさせていただければと考えている。<https://miceniseko.com/>

質疑応答

観光庁

- ・倶知安観光協会（鈴木局長）に質問させていただく。資料がニセコエリアの魅力的なプロモーション内容で素晴らしかった。ニセコの素材は非常に大切にされていることが資料を拝見して思ったところだが、どこか競争相手、ライバルでもよいが、もしくはモデルとして、ここを目指すといった場所があれば、国内・海外でも結構だが、伺いたい。

倶知安観光協会

- ・皆様と同じように、MICE は国際間競争の中で、色々なオファーがくるわけであり、現在の円安傾向において、デスティネーション（開催地）としても、クライアントの選定は、悩みどころである。皆様の話にもあったとおり、ここならではのところを打ち出すようにしているところ。ニセコエリアは、ウインターリゾートなので、ブランドとして、ニセコというキーワードを含めてとるようにしている。
- ・そういう意味でベンチマークとしては、国内ではなく、海外、特にシンガポールや、ハワイもそうだが、一番大事にしていることは、各施設で一体感を持たせたいと思っている。例えば、ニセコエリアの数十軒あるホテルの一つに問い合わせ（インクワイアリー）が入った際に、この日は取れないとなってしまうと、極端に言えばシンガポール、沖縄など別のところにオファーが行ってしまう。そういったところに対して、一体感を持たせるため、実は毎年バスツアーというのをやっている。難しいものではなく、バスを 1 台用意して、各施設を廻り、例えば、パークハイアットの方がリッツ・カールトンを見ていないケースもある。他の施設のファンクションをよく見るということは、地域の強みを知ることになるので、そういったところで、他地域をベンチマークとしながらも、ニセコモデルとして、こういったことができるか、うちは空いてないが、隣のホテルを紹介するというような、そういった広い心で、誘致できるようなプログラムを展開していきたいと考えている。

観光庁

- ・地域として動く中で、どこかが対応できなければ、シンガポールなどの海外に展開してしまうということは、MICE 業界において、よくあるということがわかった。ここが難しければ、国内の中で紹介できれば良いが、すぐに違うところに視線がいくってしまうため、その辺

のお客さんを逃さないような取組は、地域ぐるみでやっていただく必要があり、非常によい取組であると感じた。

9) その他情報共有

<事務局から開催地未定案件について説明>

※非公開のため記載なし

(事務局)

- ・本日、ご提供いただいた情報なども踏まえ、国際会議等の北海道開催を引き続き推進してまいりたい。また、各省庁と北海道の各自治体を繋ぐ役割を北海道局としてしっかり果たしてまいりたいと考えているので、ご質問、ご相談などがあれば気兼ねなく北海道局窓口までご連絡いただきたい。今後とも北海道における国際会議等の開催におけるご協力をお願いしたい。

以上

(速記のため、後日修正する可能性があります。)